

若きソーシャルワーカーのライフヒストリー研究

(その1) 専門職アイデンティティと国家資格取得

鈴木 真理子

A Study on Life History of Young Social Workers (1)

Professional Identity and Certified Social Worker

mariko SUZUKI

This research, a part of the continuous studies based on life history of social workers, focuses on social workers in 30th, whereas the past ones (Suzuki 2003) focus on those in 50th. This is for the first time that we discuss about the identity of social workers with hearing examples of young male social worker in the suburbs.

Although the studies in the past are mainly on the development of professional skills and the careers of women, this study follows how the two male social workers in their last 30th build up the identities of the profession not through education, but through experiences of their field work.

The 30th is an important period of time for acknowledging his role at work and as it becomes clear, the work increases and becomes harder. Also there is his own family especially babies to take care of. Under these circumstances, they manage to study for the license of social worker. Further are examined. I expect these details on how they got certified social worker and professional identities will interest many students of social work.

男性二事例のライフヒストリーと概要

1、二事例の位置づけと特徴

以下に述べる2つのライフヒストリー研究は、過去5年にわたり発表してきた一連の「ソーシャルワーカーの専門的力量形成過程に関する研究」^{注1)}に関連するもので、新たに世代による違いを考察する目的で30代の事例を集めた中から、特に地方の男性2例を取り上げたものである。研究の枠組みについては、最近の研究発表を参照願いたい。^{注2)}

今回の2人は地方の兼業農家出身者で、経済的事情で大学進学できず、家計のためにたまたま福祉現場で働くことになった事例である。いずれも10年ほど実務

を積み重ねる中で、福祉の専門職として知識や技術を磨きたいという思いから国家資格にあこがれ、通信教育で仕事と両立させる努力をして受験資格をとった。その上、これほど熱心に勉強したのは初めてというくらいの熱意で受験勉強に励み、1回で合格している。また資格を得た後は、職能団体の活動にも積極的に参加し、専門的知識やネットワークを多様に生かし自己研鑽に励んでいる。

個人生活においては、二人とも福祉という人の生活の幸福を追求する仕事であるがゆえ、自分の家庭と子育てを両立させ、仕事の充実と同時に家族関係も大切にする良き父親でもある。現在は男女共同参画の時代で、特に福祉現場は女性の従事者も多い。2事例は同

じ福祉領域の共働きであり、2人と3人の子育てにも積極的で、かなり残業の多い職場で責任のある事業を抱えながらも仕事と家庭の両立をみごとに図っている。

国家資格を得るための受験勉強に励む傍ら、子供と一緒に成長している家庭人としての福祉専門者の柔軟な姿勢がうかがわれる。このように多面的に柔軟に地域や家庭に自己活用ができることも、ソーシャルワーカーの専門性の一面を表しているかもしれない。

各事例のインタビューは、F県社会福祉士会に属する30代後半の会員で、調査研究の趣旨に賛同して協力してくれる現場従事者から選んだ。育った家庭背景、地域環境、中高校時代から進学・就職について、そして職場での経験を時系列にそって、あらかじめ用意した質問項目にそって2時間前後答えてもらい、テープに収めたものを起こしてまとめた。ソーシャルワーカーの力量形成過程としては、実践の領域にふさわしい仮説的14項目に基づいている。

この仮説的14項目は、詳しくは注2の論文の冒頭で述べたもので、この論文の中では表1、2の「力量形成の契機」欄に示してある。

2 商業高校からたまたま福祉の現場に ～A夫さんの生活史～

① 就職前

H県郡部の兼業農家に姉一人の下に生れる。父親は冬場出稼ぎ、母親はパートに出る。ごく普通の大人しいこどもだった。家族や親戚に障害者がいたわけでもなく、福祉には何のかかわりもない家庭だった。姉も高卒で就職だったので、自分も家計のことを考え商業高校に進んだ。

銀行か役所に就職したいと思っていた。銀行、国家公務員は無理だと思い、県庁を受けて合格枠に入ったが、ちょうどその年は採用がなかったので、アルバイトをしていた。欠員が出た県の事業団が、県北部の知的障害児の施設職員にどうか声がかかった。県南の自宅から離れるのは心細かったが、宿舎もあり、ちょうど拡張している新しい施設なので、北の辺境の地で初めて親元を離れた生活であった。

② 就職～5年目

職場に入ってみると職員はほとんど20代、30代で若く、仲間意識があり皆、創成期の意欲に燃えていた。4月採用者には新任研修があったが、途中採用者はすべてOJTで実務をしながら覚えた。

重度棟に配属され、一回り年上の先輩と組んだ。1年間はそのペアですべてのローテーションをこなすので、ペアの相性は大事であり、自分のような全くの素人は誰と組むかによって、その後の仕事の仕方や成長が決まる。

特別業務日誌などで指導はなく、通常業務は1年でほとんど覚えるが、コミュニケーションや処遇の内容は不充分だったと思う。また当時の知的障害者の重度棟では一般的であったが、管理主義で体罰もあって疑問をもち、福祉のことは何も知らないなりに、もっと人間扱いすべきだと感じていた。

3人目のパートナーが30歳くらいで福祉系大学を出ており、国立の知的障害児施設で研修を受けてきて問題意識も高く処遇改善の意見を出して、現場の実践に生かすよう働きかけるリーダーシップもあった。このパートナーの影響で利用者の視点で見ることを教えられ、職員会議で発言できるようになった。

利用者のプライバシーへの配慮を日常の介護行動の中に実現させた。職場では2年目に社会福祉主事の勉強を通信教育課程でさせられるが、初めて福祉というものに知識でふれた。ちょうどパートナーのお陰で関心も高まり、資格取得の勉強で福祉を理解する相乗効果があった。

③ 就職6年～10年

重度棟を5年経験したので、中・軽度棟への異動を申請した。希望が叶ったわけだが、同じ知的障害児でも何でもできて、話が通じるのにびっくりした。若い利用者とは冗談も言いあえ、どうして施設の中に居なければならないか非常に疑問を持った。

農家の収穫などの作業自習をして、ほとんど日常生活に困らないのでどうにか地域で暮らせないものかと考えた。ちょうど、4人ずつ生活訓練を受けて地域に適応を図っているグループホームの第1号の完成に合わせて、何人かを施設から出せた。

職場内で同じ指導員として働いている女性と結婚。2歳年上であるが農家であるなどバックグラウンドが似ていて親近感があった。当時同じようにカップルが年に5、6組もゴールインする結婚ラッシュであった。20代、30代の職員ばかりで、周囲に自然しかない辺境の地の施設で宿舎に一人暮らしであるから、気の合う仲間が部屋で集うことが多く、若いカップルが誕生するのは自然である。

仕事熱心な人は、業務や処遇のことで熱い議論を戦

わせ、飲むと本音が現われ、取っ組み合いの喧嘩もあった。そんな仕事に情熱をもつ尊敬できる先輩が大勢いて、その中で最初の10年を過ごしたことは自分にとって幸運であった。今の施設職員には、こうした交流や議論の雰囲気はほとんどなくなった。

統合失調症で気にいらないことがあると、すぐカッターを振り回す危険がある、20代の利用者がいた。彼はずっと施設内で暮らしていたが、危険度が多く、結局施設でも置いておけずに自宅に帰さざる得なくなった。当時は在宅復帰指導もなく、家族に扱い方を事前に研修受けてもらうわけでもなく、体の良いやっかい払いをしたようで、非常に心残りで、後悔もしている。

もう一人の利用者は29歳で軽度で能力は高いが、性的問題行動があった。施設の中での生活はマンネリで気持ちが悪くなるので、お兄さんが自宅で面倒をみてくれるというので就職口を探した。うまく適応できるか、問題を起こさないか心配であったが、その後うまく適応して働きながら暮らしている。就職口を探すのは苦労したが、信頼して思い切って出して成功した例である。

④ 就職後10年以降

就職して10年目の28歳のとき、同じ事業団の養護老人ホームに移動になったが、自分の希望ではなく惑った。利用者は皆黙って動きがなく、まるで石のようでびっくりした。2、3ヶ月仕事に行く気が起きないほどだったが、ちょうど一緒に異動してきた職員と問題意識を共有することができた。

これを良いきっかけにしようと話し合い、管理職にも理解が得られて、二人で外の研修にでかけた。その中でも「オムツはずし学会」に積極的に参加し、学ぶところが多かった。これが今の積極的介護、自立支援の思想のはしりであり、「生活リハビリ」という言葉を聞いたのもこの時期だった。自分なりに熱心に取り組む、生活リハビリの分野でレクリエーションワーカーの資格もとった。

老人の介護をしていて、もっと老人の医学的、心理学的なことなど知りたくなった。また仕事も日勤中心で時間に余裕もあった。将来性のことも考え、これを機に資格を取ろうと一念発起し、社会福祉士受験資格通信課程に申し込んだ。スクーリングで他の施設にも仲間ができ、勉強も助け合ってた。おそらく自分が一生で一番、勉強した時期だろう。

社会福祉士は福祉分野の国家資格として魅力を感じ

て、心から取得したかったので、取得後すぐ職能団体に属した。そこでは職場では知り合えない人脈、ネットワークが豊かになり、積極的に委員会活動もしたいと思っている。成年後見の資格もとったが生かしきれていない。

34歳で知的障害児施設に異動になったが、児童指導員の資格がなかったのでまず児童指導補助員になり、2年経過で児童指導員に昇格した。ここでは施設内の利用者と同時に地域でのネットワークづくりの活動に力を入れた。また地域の在宅の障害児・者のための会を組織し、毎月の役員会、年数回の行事などを企画し軌道に乗せた。これも施設と地域を結ぶソーシャルワーク的な仕事と自負している。社会福祉士資格を取ってから特に意識し始めているが、少しでもソーシャルワークの視点を生かした仕事をしたいと思っている。

それに加えて、施設内のケア会議の延長のような形で地域活動ができないか模索している。高齢者関係者の懇談会を同僚と一緒にたちあげた。ちょうど介護保険開始前だったので、介護保険について寸劇をつくって、福祉サービスの普及をよびかけたりして、新聞などに取り上げられた。

このように社会福祉士資格を取ったことで、ソーシャルワーカー的な地域に働きかけるような仕事をすることに意欲と自信をもつことができた。資格取得は大いにプラスに影響していると思う。

38歳で児童養護施設に異動になったが、いままでのすべての利用者と異なる対象者で最初面食らった。あまりに精神的に傷ついており、人間関係がつくれず、人間への信頼感の土台のない子供たちにどう接するか、日夜また新たな苦勞をしている。

知的障害児者も高齢者もコミュニケーションの障害、困難があり、基本的な人間関係は未熟で衰えていても、ある程度の交流が可能であった。しかし、なんらかの虐待で親から痛めつけられている子供の情緒は、自分の2人の子供と比べるとあまりにとげとげしく、荒廃していると感じた。まず養護施設の子供と信頼関係を作るところから始めているが、根本的なシステムの問題もある。

子供は自分の成長を見守ってもらい常に支えになってもらう大人を必要としているが、施設では勤務体制によって職員が変わる。また数年で施設から居なくなる。そんな根本的な仕組みが、大人の施設と成長過程であ

る子供、それも特に人間的基盤がもろい子供に対応できないと感じている。

支援費制度については知的障害児者施設が長かったので、大変関心もあり定着の方向について気がかりなことが多い。施設内に囲い込むのではなく、地域に出すためのグループホームをもっと促進すべきだと思う。また被虐待児童について、どうして親が子供を虐待するのか、親の事情、状況についてもっと知り、勉強したいと思っている。

自分は施設での直接ケアの仕事から入ったが、ケアであれソーシャルワークであれ、利用者の本当に望む

生活を支援するのが、社会福祉援助だと思う。地域に出すため、また在宅で暮らす障害者のため、様々な資源や人を結ぶコーディネート的な役割をしていきたいと思っている。

家庭では、小学校5年、中学校2年の男児の親として、共働きの夫として、家事も分担して子供中心でやっている。食事をできるだけ一緒に取るよう心がけているので、社会福祉士会の研修会や活動などもごく参加しやすいもののしか活動できないでいる。職能団体の生涯研修制度については、自分は真面目にやる方で、6年目できちんと登録している。

表1 A夫さんの力量形成過程とその契機

年齢	ライフステージ	印象的なできごと	力量形成のきっかけ（14項目）
0歳	出生	兼業農家に姉の下に生まれる。	
6歳	小学校	1学年20人ほどの小さな学校で大人しい子供だった。	
15歳	高校進学	家計のため、就職を期して商業高校に進学。	
18歳	就職	県職に合格枠に入るが採用にもれ、事業団が施設職員として採用。辺鄙な地の新しい知的障害者施設の重度棟に配属。初歩から先輩にOJTで訓練される。施設の体罰や管理主義に素朴な疑問をもつが、若い職員集団で同僚や先輩との密な交流が、福祉に目覚めさせていく。	②自分にとって意味ある職場への赴任 ③職場内の優れた先輩や指導者との出会い
20歳	社会福祉主事資格取得	職場の慣行で主事の通信を受け、福祉の基礎を初めて学ぶ	⑤職場内での研究活動
23歳	同じ施設内異動	中・軽度棟に異動し、話が通じる利用者や一般人と変らない利用者が何故施設内で暮らさねばならないか疑問を感じた。指導員の女性と職場内結婚（同じ農家出身）	⑨地域への関心の拡大
26歳	悔が残る利用者1人	統合失調症の危険行動のある利用者を在宅指導もなく、地域へのコーディネートもなく退所させた	①社会福祉実践上の経験
	うまく地域に出せた利用者1人	軽度の性的問題のある利用者をお兄さんを保護者に仕事を見つけて就職させ、地域に出した。	①社会福祉実践上の経験

28歳	養護老人ホーム異動	自分の希望ではなくあまりに活気がないのでショックを受ける 高齢者を知ろうと「オムツはずし学会」に刺激をうけ、自立支援に関心をもつ。	②自分にとって意味ある職場への赴任 ⑥職場外での研究活動
30歳	社会福祉士通信課程開始	「生活リハビリ」に興味を持ち、レクリエーションワーカーの資格を取る老人福祉や高齢者の医学的・心理学的知識と将来に向けて専門的資格がほしく、通信課程開始。職場内でも仲間と猛勉強	⑭レクリエーションワーカーの資格取得 ⑥職場外での研究活動
32歳	国家試験合格	合格で自信がつき積極的になる職能団体にも加入、人のネットワークが広がった	⑭社会福祉士資格 ⑧社会的活動
33歳	成年後見通信課程	資格はとったが、いかしきれていない	⑥職場外での研究活動
34歳	知的障害児施設異動（最初は児童指導補助員で2年後指導員）	施設と地域を結ぶネットワークづくりに力をいれる 地域の在宅障害児者の本人の会組織づくり、役員会や行事	①社会福祉実践上の経験 ⑨地域への関心の拡大
35歳	地域で高齢者関係者懇談会	介護保険についてのサービス紹介などの寸劇を演出披露	⑧社会的活動
38歳	児童養護施設に異動	被虐待児が多くて、人間的信頼が壊れているので、ショックを受ける。今後虐待の親子について事情や状況などもっと勉強したい。施設の職員体制に疑問。	②自分にとって意味ある職場への赴任
	職能団体の生涯研修制度に参加	職能団体の研修や行事など、出れる範囲で参加しており、生涯研修制度への共通研修課程への登録をした	⑥職場外での研究活動

3 農学部進学を家計のため断念し、社協に就職

～B夫さんの生活史～

① 就職前

専業農家の長男として生まれる。二人の妹があり、三世同居の7人家族だった。両親からは、跡継ぎができたと期待されていたが、物心ついた頃には、父は出稼ぎ、母と祖父は稲作作業を行っており、祖母が母親の代わりに一緒に遊んだり食事の世話をしてくれた。

経済的には豊かではなかったが、自然の豊かな地域

で友だちと夢中で遊びほうけ、両親の不在で寂しい思いはしなかった。また、地域全体が皆我が家のような地域で、特別寂しい思いにつながらなかったと思う。

中学時代、部活と遊びに専念しすぎて地元の進学校ではない高校に進学。生活の変化は特になく、中学時代の延長として過ごした。2年生の秋、クラスの推薦を受けて生徒会長となる。生徒会活動の中で、他校との交流や行事の企画、学校側との交渉などを行う中で、リーダーシップの大切さと視野の広さの必要性を学んだと思う。また、関心はなかったが県の社会福祉協議会から協力校として指定されており福祉活動にも取り

組んでいた。

両親は地元の市役所への就職を強く進めたが、この年に限って技術職、専門職のみで一般職の募集はなかった。農家の長男としていずれ跡を継がなければならないと思っていたので、せめて大学で4年間は都会に出て自由に過ごしたいと思っていた。そこで、農業改良普及員になりたい夢をもって農学部をめざした。せめてもう少し楽に農業ができて冷害に強い米作りができたという思いから、品種改良の仕事をしてみたいと思っていた。

首都圏で農学部のある大学の三大学を受験するが、合格したのは私立大学で、祖母の長年の病気により医療費がかさんで借金状態だったことが重なり、両親の説得で、4年間の自由と自立は夢と消えた。ちょうど運良くか、運悪くか、3月のはじめ、地元の社会福祉協議会で職員の募集があり、受験することになる。自分自身は当時、社会福祉協議会というものがあるどころか詳しくは知らずに、役所と同じようなところとだけ聞かされた。

受験日当日、バイクで試験会場に向かう途中でバイクが故障。どうせ受からないと思っていたが、電話を入れて遅れる旨を伝えた。後で聞くとその対応が良く、多くの受験生の中でインパクトがあったようで、礼儀たたくという親のしつけが役に立ったようだ。

② 就職～5年目

当時の社会福祉協議会は市役所の市民課の一角にあり、その職員と一緒に福祉の仕事を中心に年金、衛生、交通安全、消防と市民課の仕事も行った。その年の市役所の採用は専門職だけだったこともあり、その同期会の一員として交流が始まった。また、市役所の厚生会行事やサークル活動にも一緒に参加させてもらった。

職員数の少ない社会福祉協議会だったので、若い時期に役所の職員と交流ができたことは、今の仕事を進める上で、人的パイプを多方面に持つことができ大きく役立っている。また福祉分野だけでなく、広く自治体の行政全体を垣間見られたことは、現在広い視野で福祉を担当するのに役立っている。

当時の仕事は、当事者団体の支援活動が多かった。当事者が行いたい社会参加活動を一緒になって企画し、実施した。福祉のイロハも知らない職員だったが、仕事の中で障害者のこと、高齢者のこと、母子世帯のことなどを学び、こうした人たちの困っていること、

思いや願いを共有することができた。自分も若く、顔を覚えてもらい頼りにされる喜びを知った時期でもあったと思う。

遊休施設の活用化が議会で取り上げられ、老人福祉センターに社会福祉協議会が移転することになった。老人福祉センターは地理的に不便なところで、バスで利用者の送迎を行っている現状であった。表面上は社会福祉協議会が独立して事務所を持つことになり、活動の独自性を期待されたが、いざ移転してみると今まで訪れていた、ボランティアや生活資金を必要としていた人は激減した。とくに生活資金を必要としていた人との面接にはこちらから出向いていくため、お互いに不便を感じた。

老人福祉センターにはホームヘルパー4名が在中しており、在宅介護事業も受託実施することになった。ヘルパーさんからはおばさんパワーの偉大さを実感したが、同時に老人福祉の難しさも味わった。

③ 就職後6年～10年目

結婚は25歳の時で、同級生で幼稚園教諭の仕事をしている女性だ。決して美人ではないが明るく元気な女性でなにより子供が好きだった。翌年長男が誕生し、3年後に長女、4年後に次男に恵まれ子供が三人となった。当初から私の両親と同居し、現在我が家は9人家族になっている。

共働きを続けているが、仕事を持っているからこそ同居できている面も多い。育児や家事などは主に妻の仕事で、農業やPTAなどとの関わりは自分の役目となっている。子供の活動には積極的に係わるのが自分の姿勢である。自分が育った自然や地域の豊かさを伝え、父親としての関わっていくことに楽しみを持っている。

仕事をしていく中で社会福祉に関する知識の必要性を実感していた。役所の事務職員ではない専門職として仕事をしていきたいと思っていた。しかし上司が社会福祉主事資格取得に手間どり、自分の番に回ってきたのが26歳で、やっと通信教育の機会を得て取得することができた。

④ 就職後10年以降

29歳の時、デイサービスセンターを市から受託し開設することになった。新規で職員の募集も行ったが看護婦、介護士のための採用となり、内部移動で生活指導員になった。初めての分野にとまどいもあったが、いままでの社会福祉協議会職員を中心とした関係から、

他の福祉施設の専門職との出会いと交流が広がり大いに刺激を受けた。

地域福祉とは何んだ？コミュニティ・オーガニゼーションの必要性は？ 自分が今まで社会福祉協議会で仕事をする中で、他の専門職も連携したり議論を交わしたりする機会の少なさと、社会福祉の専門性の曖昧さに疑問を持っていた。ちょうど、自分の社会福祉援助職としての方向性が拡散している時期でもあり、悩んでいた。そこで社会福祉援助職の専門性を自分なりに確認するため、社会福祉士資格をとろうと通信課程で勉強しはじめた。

デイサービスセンターではホリデイサービスを始めることになり、土日の勤務が多くなった。土日休みの習慣から平日の休みに移行し、平日時間を持て余している自分にとって、行くところは図書館ぐらいしかなかった。幸い参考書はたくさんあるし、涼しいし、多くの学生が勉強している環境はすばらしく、受験生のように図書館に通った。図書館学習は家より勉強に集中でき、通信教育の課題レポートの作成や受験科目の勉強に非常に効果があった。

社会福祉士の受験勉強では、どの科目でも自分の今までの仕事と照らし合わせたり重ね合わせたりしながら考えていった。当然ながら仕事で体験的に学んでいることもあり、科目同士の横のつながりも理解でき、資格取得から数年たった今でも役に立つことがあり、地域や社会制度の中に解決策を見いだしたり、市民や社会が変わっていくべきことに気づく事も多い。

勉強を通じて専門的な知識の基礎を得られたことは、それまで福祉の専門性にコンプレックスを感じていたことを克服でき、福祉専門職としてのアイデンティティに自信をもつことができた。

この年、ボランティアセンターを開設することになった。社会福祉協議会としては、地域福祉関係における初めての国庫補助事業であった。兼務は認められないかもしれないが、他に人がいないのでボランティアセンター担当になった。地域のボランティアや障害を持っている人との出会い、それらの人々の願い、思い等地域とダイナミックに関わっていける仕事なので、毎日が充実していた。阪神淡路大震災には、被災地に出向いてボランティア・コーディネーターを体験できたことは、被災者やボランティアとの関係づくりを学ぶ機会としてとてもいい経験になっている。

ボランティアセンター3年間の評価を受けて翌年、

「ふれあいのまちづくり事業」の国庫補助事業を受けることができた。この年、デイサービスセンター指導員から地域福祉活動コーディネーターへと配置換えになった。この事業を通じて、当たり前のことではあるが、計画、実施、評価と仕事を計画的に実施できた。また、市民からも推進委員として参画してもらい、地域の実態にみあった活動ができたと思っている。福祉座談会やふれあいサロン事業など、地域福祉の大切さと、口コミの威力、すごさを知った時でもあった。社会福祉士としてコミュニティ・オーガニゼーションを問い直した時期でもあった。

やりがいを感じていた「ふれあいのまちづくり事業」をまだ1年残し、介護保険（指定居宅介護支援事業）に参入することになり移動となった。職員を増やすことなく、内部移動でいつも自分だけが、新しい仕事に対応させられる組織の姿勢を腹立たしく思った時期でもあった。

その上、今まで受託していたホームヘルパーとデイサービス事業を職員も含めて、市に返還することになった。今までのサービスを低下させず、新しい組織に移行させることに、どの職員もパニックになっていた。理事会の対応や管理職の考え方を通して、社会福祉協議会がひとつの専門職集団として認識されない原因をみたような気がした。

介護保険の実施後、ケアマネとして働いている。ケアマネは自分1人で、すべての責任と内部連絡の負担を一人で背負って、今までのヒューマンサービスの世界ではなく、経営の世界にいる気分がする。しかし、介護保険の中で、医師、看護師など医療関係者と話し合う機会に恵まれ、社会福祉士と異なった視点のアセスメントができ、学ぶ所も多い。

他の専門職から社会福祉職への批判や期待を一身に背負った気になり、ソーシャルワーカーの代表として相談業務だけでなく、家庭訪問などを通して「口先だけのケアマネになりたくない」と、夢中で働いている自分がいる。自分の意欲と能力を地域や社会に活かさせてもらっている。生かしているから、生きている。すべての利用者自身が必要とされるような社会。今改めてノーマライゼーションの意味を自らに問いなおしている。

日本社会福祉士会には最初から入会しており、人的なネットワークにより大変貴重な場面や研修に恵まれている。職場の先輩では、社会福祉士を取った人はい

なかったし、コミュニティー・ワークなどの技術や知識を勉強してリーダーシップを発揮してくれる人はほとんどいなかった。その点、社会福祉士の会員は皆前向きでその姿勢に励まされることも多く、少ない人数の職場にいる自分にとってはとてもよい成長の場になっている。

社会福祉士の自己研鑽に励む会員との出会いから刺激を受け、ソーシャルワーカーとして自分が本当にむいているか自問自答したこともあった。もっと違っ

た世界もみたいと、家庭や育児、仕事ととっても忙しいが、37歳の時大学の通信教育を始めた。それが自分のスタイルかなと思って、とりあえず大学卒業を目標にしている。子供たちからは、「卒業は私たちと一緒にだね」とからかわれるが、それが達成できたら、大学院で教育学を学びたいと考えている。福祉には教育がとても大切だと痛感しているので、福祉やボランティア活動に関心がある児童生徒とともに学ぶことができたらと漠然と夢を描いている。

表2 B夫さんの力量形成過程とその契機

年齢	ライフステージ	印象的なできごと	力量形成のきっかけ（14項目）
0歳	出生	三世代同居の専業農家の長男として出生。	
3歳	妹出生	父親が出稼ぎ、母と祖父が農業、祖母が面倒を見てくれた。	
6歳	2番目の妹		
12歳	中学生		
16歳	高校進学	部活と遊びに夢中で勉強せず、進学校ではない高校進学。	
17歳	高校2年	推薦されて生徒会長に。他校や教師との交渉、行事の企画などリーダーシップと視野の広さ鍛える。	
18歳	卒業と就職	家庭の事情で大学進学を断念。地元町社会福祉協議会の職員募集で採用。	
20歳	役所の一角で職員と一緒に仕事交流	福祉の仕事だけでなく、年金、衛生、交通安全など幅広くこなす他、当事者団体への支援活動から福祉のイロハを学ぶ。	
22歳	事務所移転	役所から離れた丘の上の老人福祉センターに移転。訪れる人が激減。ホームヘルパー事業の立ち上げに関わる。	
25歳	結婚	同級生だった幼稚園教諭と結婚。家事と子育ては妻、PTA、農業は自分で地域との同関係や人間関係に幅と深みがついたと思う。	
			②自分にとって意味ある職場への赴任
			⑫職場上の役割の変化

26歳	通信で社会福祉主事資格	先輩が主事資格取得に手間取り、やっと自分に番が回って来た	⑬個人および家庭生活の変化
29歳	通信で社会福祉士取得講座受講開始 国家試験合格 受験勉強	デイサービス事業の生活指導員 地域の福祉施設との協働で地域福祉、福祉援助の専門性への疑問と関心深まり、専門的知識取得を強く希望する。	⑫職場上の役割の変化 ⑤職場内での研究活動
30歳	社会福祉士取得職場移動	土日勤務の平日休みを図書館で受験勉強に当てるボランティアセンター開設（デイサービス指導員）阪神淡路大震災でボランティアコーディネーター経験する	⑭社会福祉士取得 ⑥職場外での研究活動 ⑭資格取得 ⑫職務上の役割の変化 ①社会福祉実践上の経験
31歳		日本社会福祉士会に入会。専門職集団として刺激になり、人的ネットワークとして積極的に活用し参加する。	⑧社会的活動
34歳	ふれあいのまちづくり事業の国庫補助	地域福祉活動コーディネーターとして自分の町の福祉について事業を計画、実施するよう勉強になった。ふれあいサロン事業実施。	⑫職務上の役割役の変化 ⑨地域への関心の拡大
37歳	ケアマネージャーとなる	デイサービス・ホームヘルパー事業を町に返還、介護支援事業開始。ケアマネ研修・受験合格・実務者研修しケアマネとして訪問に日夜奔走。	⑤職場内研修と研究活動 ⑫職務上の役割の変化
	職場の人事体制に疑問	職員増員無しに新しい委託事業を何でもやらせる組織に怒りと疑問ももつ	
	将来への大きな夢への準備	大学の通信教育開始。ゆくゆくは大学院進学（福祉教育学専攻）を目指す。	
39歳	介護保険業について	医療職との協働で社会福祉と違った視点を学ぶ。口先だけのケアマネは望まず、家庭訪問など夢中で仕事をしている。	①社会福祉実践上の経験

二事例についての考察

1 二人自らが認める主要な力量形成の契機(14項目から)

[A夫さんの場合の主要な力量形成の契機]

③「職場内での優れた先輩や指導者との出会い」

①「社会福祉実践上の経験（未経験のケースとの出会い、困難ケースとの出会い、特定のクライアントとの出会い、他職種との出会い）」

⑭社会福祉士取得

A夫さんの場合③の「職場内での優れた先輩や指導

者との出会い」を第一に上げている。普通高校卒業で県職員として合格はするものの採用もれで、事業団の新しい知的障害者施設の重度棟に配属。何も福祉の現場の知識も経験もないところで、すべて先輩のOJTから学んでいる。施設が開設されて2年目で専門職やベテランがいない現場なりに、若い職員はやる気と熱気にあふれていたようだ。毎晩議論や交流が深夜に及ぶほどだった。

現場での介護技術も先輩がすべて伝授してくれ、今の介護や施設処遇に比較すると古くて科学的でないと思うことも多かったようだが、それなりに良い福祉処遇をしようとする意欲が職員にあった。全身全霊で仕事に情熱をもっていた先輩職員の影響を受けたことは財産だと評価している。近頃の職員は良くも悪くもサラリーマン化しており、そんな熱心な職員は今はいないという感慨も、今は自分がその先輩の世代に属していることを考えると意味深い。

また「社会福祉実践上の経験（未経験のケースとの出会い、困難ケースとの出会い、特定のクライアントとの出会い、他職種との出会い）」をあげているのは、福祉の教育も知識も皆無であり、先輩だけでなく、利用者も教師であった。つまりすべて現場で利用者との経験から学んでいる。介護になれて多少利用者の背景や将来を考える余裕ができた頃に、印象深い経験をしている。

統合失調症の男性を在宅や地域へのコーディネート無しに退所させ、その後どうなったか行方知れずで悔いが残っている。もうひとつ良い経験としては、仕事場を探してお兄さんを保護者にして地域に出せた性的行動に問題のある男性で、仕事場探しに足を棒にして歩いたおかげで、良い職場がみつかり、施設から地域に出せた数少ない事例として印象深い。

〔B夫さんの場合の主要な力量形成の契機〕

⑫「職務上の役割の変化」

⑨「地域と職場への着目（地域の福祉課題の発見）」

⑭社会福祉士取得

一方B夫さんは、同じ職場だが常に新しい業務を任されており⑫「職務上の役割の変化」をあげている。職員数の少ない町村社協で新しい事業を受託すると、同時にそれに伴う資格取得や研修を期待されている。22歳のホームヘルパー事業、26歳のデイサービス事業

の生活指導員では社会福祉主事。31歳のボランティアセンター、34歳の地域福祉活動コーディネーターでは社会福祉士、37歳の居宅介護支援事業では介護ケアマネジャーという具合で、社会福祉協議会の事業拡大と個人の専門資格取得が相俟って、大車輪のように回転している。それをこなせた若さとやる気はまさに驚異的であるが、この協議会は人材に恵まれたというべきで、どこでもこうしたことが可能なわけではない。

自分で地域福祉のコーディネーターとして企画と実施に采配を振るった「ふれあいの町づくり事業」では最後のまとめの1年を残して職場の事情から「介護保険居宅介護支援事業所」業務に移動になっている。配置換えと同時にケアマネも取得後し、人の少ない職場の悲哀もB夫さんは感じていた。

また社会福祉協議会の仕事の基盤でもあるが、⑨の「地域と職場への着目（地域の福祉課題の発見）」をあげているのは、常に地域に根を下ろした住民にアンテナを張る仕事に取り組んでいるからだだろう。ホームヘルパー事業、デイサービス指導員、阪神淡路大震災ボランティア、ふれあいのまちづくり事業、介護支援事業所のケアマネ業務など、いずれも地域の中での視点が必要である。

2 二人にとっての国家資格取得の契機と意味

最後に2人の共通の契機としてあげられているのが⑭の社会福祉士資格取得である。30代とは同じ組織なら就職して10年目ごろで、高卒の2人はすでに就職後12年経っており、中間管理職への準備期か専門職としての確立期である。社会福祉の現場で業務を行うための基礎的資格として社会福祉士主事があり、A夫さんもB夫さんも職場の研修の一貫として、初期に主事資格は取得している。

A夫さんの場合、主事資格で専門職の基礎的知識はもっているつもりだったが、養護老人ホームに移動になり高齢者の活気のなさにショックを受け、自分の福祉全般への基礎のよろさに気づく。そこで何か自立に向けての活動として職場外の「おむつはずし学会」に刺激を受け取り組むことになる。そこから生活リハビリに興味をもち、レクリエーションワーカーの資格までとった。

この延長で高齢者の心理や様々な高齢者問題に興味湧き、社会福祉士国家資格取得に向かわせた。資格取得後の成年後見の通信課程を受講したり^{注3)}、職

場外でのネットワークが広がり、大いにソーシャルワーカーとしての自信と活動の幅が広がっている。

一方B夫さんの場合、高校卒で福祉の知識がなく社協に入っているのが、専門的勉強と資格取得は強い成長意欲となり、努力の契機になっている。最初の社会福祉主事の職場内研修も先輩が遅れていてやっと番が回ってきたのは26歳で、焦りと強い資格への意欲が表現されていた。社会福祉主事を弾みに、30歳で自から生涯で一番勉強したというくらい打ち込んだ社会福祉士通信課程、介護保険の時代の流れで事業を受ける組織のためとったケアマネと、時代に必要専門資格を次々に取得している。

これはA夫、B夫さん2人に共通しており、近年の専門職の倫理綱領にもある自己研鑽、常に自分の仕事に磨きをかけるという姿勢の浸透の表れである。こうしてみると、福祉系大学の専門教育の効果とは別に、高卒であろうと本人の意欲と心がけで特別に現場教育や研修環境に恵まれていなくとも、自らが成長する意志さえあれば、福祉専門職としての成長の契機は存在することが証明されている。

強い成長への意欲のあった今回の2人であるが、専門職としてアイデンティティの確立に社会福祉士取得が自信となり、職場外に羽ばたく契機となっていることが何度も強調されている。次回には、異分野の大学を出て福祉職につき、自分の専門性を確立するために国家資格を取得した30代男性ソーシャルワーカーの2事例を紹介し、比較検討を試みたい。

本研究は平成15年度科学研究費補助金を受けたものである。

注

注1) 保正友子他 2002 「成長するソーシャルワーカー」 筒井書房出版 を参照。

注2) 鈴木真理子 2003 「女性ソーシャルワーカーのキャリア発達とライフヒストリー研究」 岩手県立大学社会福祉学部紀要第6巻第2号62p

注3) 成年後見人制度の普及のため、また弁護士ではない社会福祉の分野の成年後見人の人材を育成するため、日本社会福祉士会は1998年から通信課程を実施した。

参考文献

- ドナルド・ショーン 佐藤学、秋田喜代美訳 2001
「専門家の知恵～反省的实践家は行為しながら考える～」 ゆみる出版
- 遠藤辰雄(編) 1981 「アイデンティティの心理学」
ナカニシヤ出版
- 稲垣忠彦他 1998 「教師のライフコース～昭和史を教師として生きて」 東京大学出版会
- 梅沢 正 2001 「職業とキャリアー人生の豊かさとはー」 学文社
- 武野 昭 2001 「人と組織を変えるコンピテンシー」 オーエス出版
- 榎本博明 2002 「ほんとうの自分のつくり方」 講談社新書